生命の源

イーシャ・サーデサイ

かつて1年ほど前に、グルマーイが私に、自分は言葉好きな人、言葉を愛する人であると言ったのを覚えています。彼女がそう言った時、私は笑みを浮かべました。私のグルが言葉好きな人であることには、信じられないほど深遠であると同時に、とてつもないいとしさを感じさせる何かがありました。グルマーイが長い間教えてきた真実の最も自然な延長のように思えました。私たちが使う言葉とその使い方は、私たち自身や私たちの周りの人々に、深く広範囲にわたり影響を及ぼします。私たちの言葉は私たちが誰であるかを反映します。それらは私たちがつくる世界を形作ります。言葉のせいで、人々は戦争に行きます。言葉のおかげで、人々は平和を築きます。

「母」という言葉がどれほどひそかに並外れているかを、最初に私に気づかせてくれたのはグルマーイでした。私の生涯を通して、この言葉やその変化形――マム、マラーティー語のアーイー、または兄弟と私が成長していく中の瞬間で、選んだその時々の呼び名――を使うに従い、その力をうすうす感じていました。確かに、子どもの頃、それが役に立つことを本能的に感じていました。「マム」、「アーイー」、「マー」、「マンマ」は彼女の注意を引く確実な方法であり、これらの名前を呼ぶ声がかなりより甘くて無邪気だった時はなおさらでした。大きくなるにつれ、グルマーイからこの言葉について――彼女の講話や詩、そして彼女が何年にもわたって私に与えてくれた英知から――さらに学びました。そして、私がまだ探究していない、意味とその重要性の完全な世界が幾つも存在しているということを、理解し始めました。

特に、グルマーイが私に話してくれたことの一つは、「母」という言葉が、最高のもの、壮大なもの、賛美と賞賛に際だって値するものを表すためにどのように使われるかです。それは究極の

最上級であり、その言葉を説明に使うことでどのようなものの価値も人々が理解することを保証します。「地球」、宇宙に浮かぶ輝く青い惑星、あるいは足元の湿った土は、「母なる地球（大地）」になります——賢明で全知であり、常に与え、成長し、再生します。植物や動物がいるあらゆる場所を示す「自然」は、「母なる自然」になり、それは広大で多様で、際限なく思いやりがあり、私たちの注意、尊敬、保護を受けるに値します。卓越性、あるいは私たちの起源——私たちが誰で、どこから来たのか——を示すどんなものも、彼女の尊い名前が付いているかもしれません。「母国語」。「母国」

「母」という言葉の独特な力は、一つには、それが本質的に関係性を表すことに起因しています。強力で賢明で、育む人やものを描写するために使える名詞や形容詞はたくさんあります。しかし、母を際立たせるものは、その定義から明らかです。母親は「生み出す存在」です。彼女は子どもたちとのつながりによって定義されます。私たちが誰かまたは何かを「お母さん」と呼ぶとすぐに、私たちは彼女の子どもであると認識します。私たちは何らかの形で私たちが彼女のものであること、彼女の反映であり、彼女の結果であること、彼女が私たちに、また私たちが彼女に注力していること、そしてある根源的なレベルで壊すことのできない絆を築いてきたことを伝えているのです。

この角度から見ると、この言葉を最もふさわしい人——何らかの形で私たちに命、そしてアイデンティティを与えてくれた人——だけに使うよう取っておくのは理にかなっています。また、母子関係がいかに複雑で多面的であり得るかを考えると、誰を「母」と呼ぶかについては慎重になるかもしれません。私たちが喜んでそのような関係を結び、必要な信頼を置くのは特定の人々や物だけです。最近、グルマーイは smother（窒息）という言葉が mother（母）のように聞こえることに気づいたと、私に話しました。語源的にも意味的にも、この二つの単語は無関係ですが、英語の単語 smother に実際に mother という単語が含まれているという事実、およびこれらの単語が互いに組み合わされて使用されることもあるという事実は、さらなる研究を促します。一般的に、私たちが窒息しているという印象、私たちの自由が何らかの形で母親によって妨げ

られているという印象は、理解の欠如から生じています。私たちが母親の立場にない場合、たとえ私たちがそれに同意しないとしても、彼女の行動が私たちを大事に思うこと、彼女の気遣いと愛の表現であることを理解するのは難しいかもしれません。

インドでは、「母」という言葉を最高の栄誉の称号として使ってきた長い歴史があります。例えば、多くの聖人は彼らのグルを「母」という敬称で呼びました。ナームデーヴ とエクナート・マハーラージ は、彼ら自身が尊敬されているマハーラーシュトラ州 出身の詩聖たちでしたが、「慈愛深い母」を意味する深い献身を示すマラーティー語の言葉、マーウーリーという名前で、ニャーネーシュワル・マハーラージ を呼んでいました。今日でも、マハーラーシュトラ州の人々はニャーネーシュワル・マーウーリーと言い、マハーラーシュトラの詩聖たちの信奉者が、パンダルプールへの毎年の巡礼の途上で「ニャーネーシュワル・マーウーリー、ニャーナ・ラージャ・マーウーリー」と歌うのが聞かれます。

インドの教典の伝統の神々でさえ、「母」という名前が付けられているか、母性を想起させる言葉で表現されています。ニャーネーシュワル・マハーラージ は、彼自身が神をアーイー、すなわち「母」と呼んでいるアバンガを作りました。 その一つで彼は、ヴィシュヌ神のさまざまな名前（つまり、ヴィッタール、クリシュナ、クリシュナ神の別名であるカーンハー）にアーイーを付けて、「ヴィターイー・キターイー、マージュヘー・クリシュナーイー・カーンハーイー」と歌っています。

また、インドの伝統の神々に敬意を表して建てられたすべての寺院の重要な特徴であるガルバ・グラハもあります。ガルバ・グラハのガルバは、サンスクリット語の「子宮」を表す単語（ガルバーシャヤ）と同じ語根を持ち、寺院の建築上の特徴として、神体が祭られその前に信奉者がダルシャンに来る、壁をくぼませて造ったような空間です。言語的なつながりは重要であり、母親の子宮が生命が生まれる空間であるのと同じように、神も何か――この場合は現れている世界――の源であることを示唆しています。西洋では、ガルバ・グラハに対応する用語はラテン語のサーンクタム・サーンクトーラム であり、それはほとんどその核心を強調しているようです。

サーンクタム・サーンクトーラムは、ユダヤ教の神殿で最も神聖な場所を指すヘブライ語の言葉の翻訳で、「聖地の中でも最も神聖な場所」を意味します。

***

私たちの生活に最も大きい力と影響を持つ人々をこの名称で呼ぶことへの愛着によって示されるように、母親への敬意は――特にインドで――女性のシャクティ、またはエネルギーを尊重するというより幅広い伝統に関連しています。

これは、恐らく何よりもまず、言語に反映されています。インドの幾つかの言語の単語は、それらが何であるかに応じて、男性形または女性形になる傾向があります。概して、美しい、力がある、強い、または高潔であると見なされるものの単語は、文法的に女性形の語です。ヒンディー語、ウルドゥ語、サンスクリット語では、これにはアーシャー（希望）、シュラッダー（信仰）、バクティ（献身）、クシャマー（許し）、カルナー（慈悲）、ドゥリダター（決意）、スンダラター（美しさ）、ローシュニー（光）、ハンシー（笑い）、ムスクラーハト（ほほ笑み）、チャーンダニー（月光）、シャーンティ（平和）、そしてクシー（幸福）などの単語が含まれます。インドの多くの人々は、愛する娘の名前としてこのような言葉を使用しています。

女性のシャクティ、またはエネルギーは、崇拝の場所や宗教的および精神的な芸術作品でも、一貫して目立つ位置を与えられています。特別にさまざまな姿の女神にささげられた寺院が数多く存在します――例えば、パールヴァティーをたたえるタミル・ナードゥ州マドゥライのミーナークシー寺院のような高くそびえ立つ驚異的な建築、ヴァーラーナシーの鮮やかな赤いドゥルガー・マンディルのような有名な巡礼地、あるいは、グルデーヴ・シッダ・ピートゥに近い、マハーラーシュトラ州ヴァジュレーシュワリ村にある女神ヴァジュレーシュワリの寺院さえも挙げられます。

一方、男神にささげられた寺院には、常にその神の配偶者の社が含まれます。時にはその配偶者は、主となる神と同じ社(やしろ)におり、彼のそばに立っていることもあります。ヴィシュヌ神が崇拝される所では、マハーラクシュミーも崇拝されます。シヴァ神に敬意を払う所では、女神パールヴァティーにも敬意を払わなければなりません。ヴィッタール神は、いつもラクマイと共に描かれます。インドでは、シャクティなしにシヴァはなし、すなわち、女性の伴侶なしにはデーヴァたち、男性の神々は完全ではないと言われています。配偶者に具現化された女性的なエネルギーは、彼らが進めているこの世界を創造し、維持し、消滅させることを遂行するために不可欠です。要するに、彼らはそのエネルギーなくしては、シャクティ、すなわちその仕事をするための強さや力を欠いてしまうのです。

そのようなインドの伝統において、女性的なエネルギーがどのように表現されているか、同様に女性的とは何かについての私たち自身の視点から考えた時、私たちが得る全体的な印象は、そのエネルギーは世界の物事を本当に動かすもの――同時に、そこに生きる価値を作り出す豊かさと美しさを世界に与えているもの――だということかもしれません。グルマーイは、例えば、彼女がいかに花や花びらの曲線的な動きにしばしば魅了されるか、そして、それをとても魅力的にしているのは、女性的なシャクティの表現方法なのだということを私に話してくれました。

母親、または母親の性質を体現する人は、いろいろな意味でこのシャクティの模範です。彼女は子どもたちにとって強さそのものです。彼女の美しさは彼らが初めて知るものであり、その性質と輪郭は彼らの生涯を通じて意識の中に刻まれて残ります。(マハトマ・ガンジーはかつて、「純金に金めっきをすることは可能かもしれないが、誰が母親をより美しくすることができるだろうか？」と言いました)。彼女は純粋な性質を持ち、その純粋さは無私の意図から、彼女が世話をする者たちへの惜しみない寛大さから生まれました。彼女は、安全、親密な絆、無条件の受容、信頼の代名詞です。すなわち彼女は、自分自身にとって家なのです。

私はグルマーイから、異なる文化の人々がある概念や考えをどのように表現するのか――どんな言葉を使い、それらの言葉がどのように互いに関連し、また異なるのか、それぞれがどのような意味のニュアンスをもたらすのか、そして、それらの多様な意味合いが、目の前の概念をより詳しく理解するのにどのように役立つのか――について認識を深めることを学びました。グルマーイはしばしば、人々が自分たちの母親を呼ぶ時に使う言葉に光を当ててきました。注目すべきだと気づいたことは、「母」という言葉がさまざまな言語間でどれほど似ているかということです。ヒンディー語では、「マー」あるいは「マーター」と言います。英語では「マザー」、「マム」。スペイン語では「マドレ」あるいは「ママ」。ドイツ語では「ムター」、「ママ」、「マミ」です。この言葉にはさまざまな言語に現れている普遍的な側面があり、それは暗に、子どもの人生における母親の役割の普遍性を反映しているように見えます。彼女が誰であろうと、どこから来ようと、母親は母親であり、母親なのです。

***

シッダ・ヨーガの道でもまた、最も愛するものを言い表すのに「母」という言葉を使います。最近、私はグルマーイに 40 年近く仕えてきたシッダ・ヨーガの僧侶であり、瞑想ティーチャーであるスワーミ・ヴァースデーヴァーナンダと話していました。彼は、グルマーイが「グルマーイ」として知られるようになったいきさつを話してくれました。

それは 1983 年の秋のことで、グルマーイはグルデーヴ・シッダ・ピートゥに居住していました。当時は、誰もがグルマーイのことを「スワーミ・チッドヴィラーサーナンダ」とか「スワーミ・ジ」と呼んでいました。グルマーイとのサッツァングで、頻繁に司会や話し手を務めたスワーミ・ヴァースデーヴァーナンダは、それまでしてきたのと同じように、グルをスワーミの一人として呼ぶことを、次第に居心地悪く感じていることに気づきました――そして聞いている人々もそれに当惑していたのです。そこで、スワーミ・ヴァースデーヴァーナンダは、彼女の敬称が独特で適切な重みを持つように、他の名前の可能性をグルマーイに提案するべく、他の数人と共に意見を出し合うことにしました。彼らはまた、簡潔で覚えやすく、発音しやすい名前を探していました。なん

と言っても彼らはバクタ、すなわち熱烈な信奉者で、しばしばグルに祈っていました――名前が短ければ短いほど、彼らの祈りの成果はより早く聞き入れられることでしょう。・

ある日の午後、スワーミ・ヴァースデーヴァーナンダはサッツァング・ホールの一つで、音楽の練習に参加していました。その日、彼と仲間のミュージシャンたちは、現代のマハーラーシュトラ州のトゥカデャーダースという名の詩聖が作ったアバンガを学んでいました。バーバ・ムクターナンダはサーダカとしてインド中を旅している時に、彼に出会っていました。そのアバンガは、「アーヴァダリー・グルマーイ」と呼ばれていました。

「グルマーイ」は、マラーティー語（ならびにヒンディー語のようなインドの他の言語）で、「グル・母」という意味です。それはまた「グルの原理を体現する者」という意味の他の言葉と密接に関連しています。

スワーミ・ヴァースデーヴァーナンダが、チャンティングシートのこの言葉とその翻訳を読んでいたまさにその時、サッツァング・ホールの扉が開きました。そこにはグルマーイがいました！　彼女は一瞬練習の様子を見て、再び扉を閉める前にスワーミ・ジにほほ笑みました。

翌朝、グルマーイが中庭に座っていると、スワーミ・ヴァースデーヴァーナンダがダルシャンのために前に来ました。手にはグルマーイに提案しようと、名前のリストを持っていました。

プラナームをささげた後、スワーミ・ヴァースデーヴァーナンダはグルマーイに少し近づきました。多くの人々が近くに座り、ダルシャンのために前に進み出ていました。そして、彼は誰にも聞かれたくなかったのです。彼は静かに、そしてとても謙虚に話し掛けました。「あなたにお話ししたいことがあります」と、彼は言いました。「それは、私たちがあなたをスワーミ・ジと呼び続けることができないということです」

グルマーイは物問いたげに、スワーミ・ヴァースデーヴァーナンダを見ました。

「それで？」と、彼女は彼に言いました。

「あなたをお呼びする時にふさわしいい名前を、お見せする準備をしてきました」と、スワーミ・ヴァースデーヴァーナンダは言いました。

「続けて」と、グルマーイは言いました。

スワーミ・ヴァースデーヴァーナンダは、名前が書かれた紙を見下ろしました。彼はためらいました。何らかの理由で、彼はリストのすべての案を読むことができませんでした。口にする気になれなかったのです。彼が言えたのは、「あなたをグルマーイと呼ばせていただけますか？」ということだけでした。

スワーミ・チッドヴィラーサーナンダは目を閉じました。ほんのわずか、彼女は左右に体を揺らしました。しばらくして、スワーミ・ヴァースデーヴァーナンダに目を向けました。彼女の表情は柔らかく、目には無限の深さがありました。穏やかに、彼女は言ったのです。「ええ。グルマーイと呼んでもいいです。皆にも伝えてください」

グルマーイはその後間もなく、中庭を立ち去りました。人々が散り散りになっていく中、スワーミ・ヴァースデーヴァーナンダは、グルマーイが彼に与えた指示を実行するために行動を開始しました。彼が最初に話したのは、グルデーヴ・シッダ・ピートゥに何十年も住み、セーヴァーをささげている、シッダ・ヨーガのグルたちの長年の信奉者であるダダ・ヤンデーでした。ダダ・ヤンデーはその名前を聞くとすぐに、中庭で踊り、歌い始めました。「グルマーイ！ グルマーイ！ グルマーイ！」

瞬く間に、人々は興奮して固定電話を取り、彼らが知っているすべてのシッダ・ヨーガの信奉者たちに電話をかけ、その言葉は広がりました。拡大し続ける光の星座のように、家から家へ、町から町へ、都市から都市へと明るく照らし、その名前は世界中に広がったのです。

その時から、スワーミ・チッドヴィラーサーナンダはグルマーイと呼ばれるようになったのです。

© 2021 SYDA Foundation®.著作権所有。